
EXTRA！転生生活始めさせられました

永月 夜刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EXTRA！転生生活始めさせられました

【Nコード】

N1580N

【作者名】

永月 夜刀

【あらすじ】

リリカルな世界から恋姫の世界に送られた橘 朱兎。だが彼が恋姫の世界に送られた時、実はその分け身は別のところに飛ばされていた！

＊注意 このSSを読む前に、作者の前作である『幻想と現象と残像と………現存?』を読むことをオススメします。

プロローグ YOU逝っちゃいなよ! (前書き)

この作品も相変わらずのチート&原作崩壊です。そういうのがお嫌いな方は読むのを辞めて、べつのSSを読むことをオススメします。

それでもいいと言う方のみ読むようにしてくださいね？

プロローグ YOU逝っちゃいなよ!

解せぬ……何故に俺はいまだに此処にいるのか……

「簡単なことだろ? 俺がお前さんを送ってねえからにきまってんじやん」

「さっきそのバットでブツ飛ばされた記憶があるんだが?」

「だろーなー」

「なら、ここにいる俺はなんなんだ?」

「いやゝなんつーかさ? あのまま送るのも面白くないじゃん?」

バキィッ!

「とりあえず、齒を食いしばれ」

「もう殴ってるよな!?!」

「結局用意した食材等は無駄になったわけだろう」

「いや? 前に言ってた世界にはもう行ってもらったぜ?」

「……なに?」

「お前さんを2人に分けるって言ってただろ？それをちよつとした
出来心で3人に……」

ゴシヤアッ！

「ちよっ！蹴るなって！」

「前回のは条件達成プラス次の条件ということで納得していたが、
今回は完全に

お前の娯楽だろう？」

「あゝ……まあそうなるわなあゝ」

ドガアア！

「よし、もう一発殴らせろ」

「だからもう殴ってるじゃん！？」

「気のせいだ」

「いやいやいやいや！」

「で？今度はどこへ行くんだ？」

「スルーすんなよ!？」

「やかましい。で? 答えは」

「あー……まあいいや……とりあえず今回はお前さんの能力の封印はなしな」

「ふむ……なにをさせる気だ？」

「ついでに達成条件もなしにしとくから」

「……何が目的だ？」

「H A H A H A! まあ好きに生きてればいいってことさ」

「制限も目的もなしか……何のつもりだ？」

「いや? 特にねえよ? ま、頑張って逝ってこいって!」

「なんか気に喰わないんだが……」

「大丈夫大丈夫! まったり生きてりゃいいんだって! ってことでいつてら」

その瞬間俺の足元に避けることが不可能なほど広い穴が開いた。一体どこに繋がっているのかは全くわからないが、とりあえず一つは確定だな。

「次に会ったら、顔の形が歪むほどに殴ってやるからなっ…！」

そういった後、軽き引きつった表情のゼウスを見たのが俺のそこでの最後の記憶だった。

プロローグ YOU逝っちゃいなよ! (後書き)

と、いうことで作者の妄想外伝が始まりました! 恋姫を考えてたはずなのに?

おかしいなあ? と思いながらもネギま!の世界に行った……はずです!

恋姫同様に更新は遅いかも知れませんが、長い目で見てやってくださいませ!

第1話 変身って書くと聞こえはいいけど変態って書くとダメだね（前書き

適当に書き始めた第1話です。

ちなみに作者は単行本27巻くらいまでしかネギま!の知識がありません

ああっ!石をなげないでっ!

第1話 変身って書くと聞こえはいいけど変態って書くとダメだよ

さて、ここは一体どこだ？あの穴に落ちた方がいいが全く状況が把握できないんだが……

とりあえずどこかの山の頂上付近だということはわかるんだが。にしても俺だから落ちて大丈夫だったが、普通はこんな地面に上空から落とされたら意識を失って

激突↓即死のコンボを喰らうところだぞ？

……まあとりあえずここがどこかを調べるか。っと……手紙？

『お！この手紙を読んでいるってことは無事に着いたみたいだな！じゃあ軽く説明

しとくぜ。お前さんが居る場所は、魔法世界の辺境の辺境のこれまた辺境の山の

頂上付近なわけだ。まずはいろいろとやらないといけないことがあるだろうから

人が居ないようなところに見たぜい！あと……』

ここから先が読めないんだが？裏……何も書いてないよな？

ポトツ

ん？何か落ちたか？……俺の目がおかしくなければ、いかにも怪しげな小さな

紙包みがあるわけなんだが……まあいい、拾ってみるか。

『手紙の続きが見えない場合は同封の錠剤を飲むといいよ☆』

なんかイラッとした……次ぎあったら全力でボコる！まあこうしていても何も始まら

ないだろう。仕方ないコレを飲めばいいんだな？ま、俺には毒なんかも効かないから

問題はないだろう。ゴクリ……と……

ドクンッ！

なん……だ……！？身体が熱い！うあああああああああ！

数分後……

なんだったのかな……もう熱さは治まったみたいだけど？なんだろう？身体に違和感があるような気がするんだけど？あ、手紙の続きを読まなきゃ。

『あと……おお！ちゃんと薬を飲んだみたいだな！フッフッフ………これでお前さんは

正真正銘の女だぜえ！

「なっ！どうということ！？って声が！？」

さっきの薬で身体だけじゃなくて魂まですっかり女性化したからな！ちなみに解除とか

できないし、認識障害で男に見せることも変身魔法で男になることもできないように

しといたからな（笑）

あと、その世界は原作開始2000年前になってるからな？その身体になれるためにも

いろいろ時間がかかるだろうしな！ってことでお前さんの落ちた場所に屋敷も用意した

から頑張れよ。ゼウスより』

なにこの急展開……女性化ってなによ……TSなんて望んでないよ！
そっか……さっきの

身体の違和感の正体はそのせいだったのね……もうなんかいろいろ
絶望した！

クウ

あう……絶望してもお腹は空くのね……そういえば屋敷を用意したって……もしかしてアレ？

「すごく……大きいです……」

彼……もとい彼女の背後の森がなくなり巨大としかいいようがない
屋敷（日本式武家屋敷）

が鎮座していた。見ただけでその大きさがわかるほどで山の頂上付近の土地をそのまま

水平に切り取り整地し、そこに家を置いた感じである。

「まあとりあえずお腹減っちゃったから、家に入ってみようかな」

中に入ると、キッチン・風呂・トイレ・空調は完全に21世紀仕様だった。

「いろいろ突っ込みどころ満載よね……まあ便利だからいいけど。それにしても広いなあ」

一人暮らしをするには向いてないだろう。主に広さ的な意味で。とりあえずキッチンの近くの部屋を自室と決め、これからのことを考えることにした。

「とりあえず、さっきのゼウスの言葉からわかるのは……魔法世界と原作と認識障害ね。」

この身体にもなれないといけないし……いろいろってこのこともあるのかな……」

考えながら屋敷の中を散策してみる。予想以上に大きいようだ。さっき見た風呂は洋式だったが、裏手に回ってみると2〜30人は一度に入れるくらいの大きさの露天風呂があった。ゼウスは何がしたかったのだろうか……？

「とにかく：一人で考えてても埒が明かないわね。んー、よし。デ
イーヴァいるよね？」

『はいマスター』

「よかった。いなかったらどうしようかと思ったよ」

『先ほどの手紙は私も一緒に見てましたけど……本当に女性になっ
てしまったんですね』

「みたいだね……魔力とか魔法とかで試してみたけど、やっぱり戻
るのは無理みたい……」

『そうですか……だったら名前はなんて呼べばいいんですか？』

「あ！そっか……名前名前……」

全く考えてなかったため、少し悩んでしまったが……

「うん。決めた！ま g『日本人名ならやめたほうがいいですよ？』
なんで？」

『鏡を見たらいいかと思うんですけど……』

「鏡鏡……って……はああ！？」

丁度よくおいてあった姿見を覗くと、膝裏まである真紅の髪と金色の瞳をもった
絶世の美女が写っていた。身長は160cm前後、体重&3サイズは禁則事項です！

『すごく美しいですよ？』

「なんでさ……」

『手紙の裏は見なかったんですか？傾国の美女も真っ青なほど最高な容姿にしとくぜ！だそうですよ？』

「なによ……その要らない設定は……」

『ということで、名前は洋風にしたほうがいいと思いますよ？』

「……そうね。どうしようかなあ」

そうして暫く考えていたが、ぶっちゃけ面倒になったのか、知っている名前をほんの少しだけ変えて使うことにしたようだ。

「エミリア……でいいんじゃないかなあ」

『ファミリーネームの方はどうするんですか？』

「んー……スカーレット？」

『……安易ですね……』

「しょうがないじゃん！思いつかないんだし！髪も紅だからいいかなあって思ったんだもん」

『いいんじゃないですか？じゃあ私はこの世界を調査しますね』

「うん、お願いね」

そういつてディーヴァを展開させ、ビットを射出する。（ディーヴァの能力は作者の別作品『幻想と現象と残像と……現存？』をご覧ください。微妙な宣伝でした）

「じゃあ今のうちに食事の用意でもしよっかな」

そういうと、エプロンを着けながらキッチンに向かうエミリアだった。

第1話 変身って書くと聞こえはいいいけど変態って書くとダメだよね（後書き

はいっ！っということだね！

おぜうさまの名前を使わせていただきました！

なぜかって？それは作者の頭に一番最初に出てきた名前だからです！

おぜうさま好きな方には不快かもしれませんが……とりあえずは

ゆっくり書いていくつもりです。感想とか待ってます！

第2話 それからどうした（前書き）

他のSSも書かずになにやってるのかわからない作者です。

今日はお盆なので坊さんが来るゝ！きっと来るゝ

ってことでとりあえず早々にUPです。

第2話 それからどうした

この世界に来てから、早くも1200年立ちました。え？早すぎる？そんなこと

言われても……延々自分の限界を確認するためと、緊急の行動が出来るようにと

自分の身体に慣れるために、唯只管自分を苛めてただけですよ？

「エリー？ぼーっとしてどうしたんですか？」

「え？そうね……ちよつと物思いに耽っていただけよ」

そういつて、この1200年でユニゾンデバイスとして自立行動をするように

なったディーヴァに答える。この世界に来た時は、まだインテリジェントだけ

だったんだけど……なぜかこの屋敷は地下に、研究室とありとあらゆる素材が

あったからつい……

作っちゃった☆

でもおかげでこの広い屋敷に一人きりじゃなくなったから、私とし

ては大成功

だったのよ？最初はマスターとしか呼んでくれなかったんだけど、1000年

くらい経ってやっとエリーって呼んでくれるようになったもの。確かりりなの

でもツヴァイがはやてちゃんって呼んでたからディーヴァも大丈夫だと思って

何度もOHANASHIしたのが効いたのかな？

「またぼーっとして……お茶が冷めてしまいますよ？」

「くすっ…ごめんなさい？」

「どういたしまして。そういえば、最近屋敷の周りの山が騒がしいですね」

「そうね。私たちだけが居るわけではないのだし、動物でも住み着いたんじゃないかしら」

「面倒なことにならないかればいいんですけど……」

ちなみに、今は屋敷の外でテーブルとデッキェアを用意して紅茶を飲んでるのよ？

流石に純和風の屋敷でドレス（私服はドレスか着物しかディーヴァが許してくれない）

に紅茶は似合わないものね。

「あ、なにか大きな生物が近づいて来ます」

「……たしかに大きいわね。でもそれほど強そうでもないわよ?」

「エリーは規格外だからですよ」

「あらあら、ひどいわね」

そう言って二人で笑っていると、森の方から体長5mはありそうな犬?が現れた。

「あらあら……ずいぶんと大きなわんちゃんね」

「そうですね。5mはあるんじゃないでしょうか」

「キサマラハナニモノダ」

「ねえデーヴァ」

「ダメですよ」

「まだ何も言っていないじゃない」

「屋敷内では飼えません」

「もう……」

「コタエヨ！キサマラハナn『黙りなさい』グウ！」

「まったく……私の寛ぎの時間を邪魔するなんて重罪なのよ？」

そういつて歩み寄る。するとその犬？はいつでも飛びかけられるように身構えた。

「ふう……『喋っていいわ』それで？一体何のようなのかしら？」

「ワレハコノモリノアルジダ」

「そう、私に迷惑がからないなら好きにしてもいいわよ？」

「ワガナワバリニンゲンガイルノハユルサヌ！」

「心が狭いわねえ……で？私たちをどうしたいのかしら？このわんちゃんは」

「ワレh『翻訳』何をした」

「聞き苦しかったから聞き易くしただけよ？」

西洋魔法とは違うけれど、言霊の呪法も立派な魔法よね？ 神力もEランクなんだから普通に使えるだろうと思ってこの世界に来てから習得したのだけだ。想像以上に使い勝手が良くてびっくりよ。

「それで？」

「我は犬ではない！ 幻狼族が長だ！」

「そう、その長が何のようなの？」

「私の縄張りに人間が居るのは許せぬ。よって排除に来たまでだ」

「あらそう…でも残念だけれど、貴方では無理よ？」

「ふざけるな！ 噛み殺さ『おすわり』なん……だと……！？」

身長160cmない位のわたしの前に5mの狼がお座りをしてる…結構シユールね。

「自分より圧倒的に力量が上の相手を殺せると思って？ あ、『お手』

」

「くっ！なぜ私の身体が貴様の言うとおりに動くのだ！」

「簡単なことよ？私の方が貴方より強いから。それだけでしょう？
あら、肉球が

気持ちいいわね」

「ふざけるな！貴様からはなんの圧力も感じぬ！」

「そんなの私が抑えているからに決まっているでしょう？しょうがないわね……

ディーヴァ、少し開放するわよ？」

「わかりました。では屋敷には障壁を張っておきますね」

「よろしくね」

そう言って屋敷の方へ下がっていくディーヴァを見送ると、狼の方へ向き直り

「じゃあ1割だけ開放するわ。納得できたらその場に伏せなさい？」

直後にその場を凄まじいまでの圧力が覆った。たったの1割しか開

放していないのに
狼の実力など遥かに凌駕していた。そしてそれに気付いた狼は耳を
伏せ尾を丸めその
場に伏せた。

「あら……わかったみたいね？」

「……確かに我では足元にも及ばぬようだ」

「素直な子は好きよ？」

そういつて艶然と微笑むエミリアに、今更ながら狼は見惚れてしま
った。

「そうね……この屋敷の周りの山は貴方の縄張りなのかしら？」

「そうだ……いや、そうです」

「ふふっ、話し方は今まで通りでいいわよ？」

「む……すまぬ」

「じゃあ貴方は自分の縄張りど、私の屋敷の警護をお願いしようかしら？」

「どうということだ？」

「簡単なことよ。私は不要な干渉が嫌いなの。だからこの屋敷に不
用意に近づくものが

無いようにしてほしいのよ」

「……了解した。幻狼族の長として、その任を受けよう」

「ありがと。ところで貴方の名前は？」

「名など無い」

「あら……それだと呼びづらいわねえ……」

「問題ない。我にはn「じゃあポチね！」それは許してくれ……」

「どうして？可愛いじゃない♪それに、呼ぶのは私とディーヴァく
らいでしょ？」

「ぬ・ぬう……」

そんな感じでなし崩し的に彼の名前はポチと決められた。初めこそ
気落ちしていた
彼だったが。それが親愛の情を込めて呼ばれていると気付いた頃か
ら気にならなく
なったようだ。

そして、初めて屋敷をポチが訪れてから10年の歳月が流れたころ。
屋敷には数匹の
幻狼族の者の姿と、ポチと戯れるエミリアの姿があったそうだ。

第2話 それからどうした（後書き）

ということで屋敷の周りの森を縄張りとする幻狼族^{フエンリル}を出してみました。

ぶっちゃけエミリアのペットですW

でもおかげで屋敷のセキュリティは万全ですね。

では感想の返事？を

煌 焰様感想をありがとうございます。作者もおぜうさまが好きなので間違うことはアリマセンヨ？

さすがにそのまま使うのもためらわれたので『知っている名前の一部を変えて』と本文にも明記しておきました。レをエに変えたただけなんですけどね。

では、また次話をお待ちください！

第3話 なんかいろいろ間違ってる？（前書き）

激しく短いです。暫くブランクがあるとやはり難しいですね……

第3話 なんかいろいろ間違ってる？

Side ディーヴァ

ポチがこの家に来てから200年ほどがたちました。みなさまこんにちわ。または
こんばんわ。もしくはおはようございます？ にはともあれ私はエリーのデバイス
のディーヴァです。最近のエリーは……というかこの屋敷は大変です。屋敷の周り
の山々には幻狼族がいるのであまり人は近寄りませんが…代わりに寄って来る者が
出てきました。

ああ……今も来ているようですね……

「だからさー！俺の女になれっ！」

「……ディーヴァ、お客様がお帰りよ」

「おいおい！俺は帰るなんていつてねえっ！」

「あら？そうだったかしら？」

「いいじゃねーかよ。こう見えても俺強いんだぜ？」

「へーそうなの。良かったわねえ。ポチく邪魔だからこれ捨ててきてくれないかしら？」

「……残念ながら我では敵わぬゆえ」

あらそう、残念ね……などといいながら、今日もいつものように屋敷の外で紅茶を

楽しんでいるのですが。あの方もいい加減諦めるということ覚えろと思う

のです。あの方がこの屋敷に来られるようになってから、毎日騒がしくて困ります。

あの方のお名前は……

「いい加減迷惑なのだけど？」

「っつーかよー。なんで俺がこんなに言ってるのに断るんだよ」

「気が乗らないから？」

「疑問系っ！？」

「まあいいわ。いたいなら居ても」

「おお！やっとなのk「私は少し用事があるから外出するけれど」
まてやこら！」

「何かしら？」

「俺がいつまでも甘い顔をしてると思ったら大間違いだぞ！」

「そう。だったらどうするのかしら？」

「力づくでこの魔王たるアスモデウス様の下僕にしてやってもいいんだぜ！」

「……はあ。いいわよ？やれるものならやってみれば？」

「貴様……」

そういうと本当に怒ったのか、かなりの魔力が周囲に満ち始めました。魔王というの
あながち嘘ではなかったのかもしれない。ですが……残念ながらエリーの5割にも
満たない魔力では何も出来ないと思われるますよ？

「……面倒ね」

「その言葉を後悔しながら跪くがいい！」

「久しぶりに禊ぎの祝詞でも唱えてみようかしら。十種大祓とくさのおおはらいでいい

わね」

そういうと、一つ拍手を打ち目を瞑り言葉をつむぎ始めました。ここからではよく聞こえますねが……ああ少し聞こえますね。

きのえきめえひのちのえかめをみぞのえみつのと
甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

ひふみよいむなやことにおと
一二三四五六七八九十瓊音

ふるへゆらゆらかくのりせは
布瑠部由良由良如此祈所為婆

どうやら唱え終わったようですね。最後にもう一度拍手を打った瞬間、周囲に満ちていた魔力が完全に霧散してしまいました。どうやら祝詞というもので魔族にもダメージが与えられるようです。アスモデウスさんの顔色が紙のように真っ白です。

「て、てめえ……禊ぎとかふざけんなよ……」

「あら、魔族にも効き目があるみたいね？その様子じゃあ何も出来ないでしょう？今日は早めに帰ったらいいんじゃないかしら？」

「くっ、くそがあ……」

そういう残して帰っていききました。それにしても捨てゼリフですか……やられ役みたいですネ。

それにしてもエリーが外出というのはどういことなのでしょう？全然聞いていないので

すが……聞く前にポチに乗って行ってしまいましたね。仕方ありません、帰ってきたらじっ

くりと高町家式のOHANASHIをしないといけませんね。

第3話 なんかいろいろ間違ってる？（後書き）

ということできさり気にUPです。短いうえに何をしたいのかがわかりません。

でも思い立ったようにUPしてみる！忘れられてるかも知れませんがどね…

では、また次のUPで……いつになるかわかりませんが……お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580n/>

EXTRA！ 転生生活始めさせられました

2010年11月24日21時30分発行